

# 錦林だより

kinrin—s@edu.city.kyoto.jp

臨時号 学校評価結果版

平成30年12月3日

京都市立錦林小学校  
校長 近藤 清美

## 平成30年度前期学校評価結果のお知らせ

保護者の皆様にはお忙しい中、学校評価にご協力いただきありがとうございました。

皆様からいただいたご意見や保護者の皆様及び児童へのアンケートの結果、教職員の自己評価をふまえ、引き続き継続する取組や改善していくべきところを全教職員で共有し、今後の教育活動に生かしていきたいと考えております。大変遅くなりましたが、結果の概要についてお知らせいたします。

### 【アンケート方法】

それぞれの質問の項目について、保護者・児童・教職員の立場で回答できるようにしました。質問の文言は多少異なりますが、同じことがらについて、3者の意識におけるずれの有無がわかるようにするためにです。

### 【アンケート結果より】～紙面の都合上、全項目は掲載できませんので、ご了承ください。～

#### ◆ ⑤ 子どもが 進んで読書をしているか

児童・教職員は、ともに8割前後が「よくできている」「大体できている」と回答しているのに対して、保護者の方々は、「よくできている」「大体できている」「あまりできていない」の回答がそれぞれ25%～35パーセントとなりました。学校では、進んで本を読む子どもたちの姿をよく見かけますが、ご家庭では必ずしもそうではないことがわかります。また、読書を好きでない子どももいますので、ご家庭での読書となると、個人による差も大きいのではないかと思われます。読書が学校だけで終わらないよう、本を読むことの大切さについて、継続して子どもたちに伝えていきたいと思います。ご家庭でも、特にテレビやゲームの時間が多くなっていないかという点と関連させて、話し合っていただければと思います。

#### ◆ ⑥ 子どもの宿題・家庭学習の習慣が定着しているか

この質問に関しては、保護者・児童・教職員ともに、「よくできている」「大体できている」と回答した割合が8割前後となっています。ご家庭で学習習慣について意識を高める取組をしていただいていることに、感謝いたします。学校での学びと家庭での学びを連動させることができること、学習内容の定着に大きく影響しています。毎日の習慣づくりだけでなく、「どのような内容の学習をするか（させるか）」という点についても学校として考えていかなければならぬと考えています。ご家庭でも、「習慣がついているから大丈夫」と目を離すのではなく、学習の内容を把握していただくとともに、それぞれのお子さんのがんばりや課題などについても見ていただき、お気づきのことがありましたら、担任にご連絡いただくなどのご協力をいただけますと幸いです。学校とご家庭との連携を深めることができると考えます。

#### ◆ ⑧ 子どもが 楽しく学校に通っているか

学校としては、何よりも気にかかる内容です。すべての子どもたちが毎日元気に楽しく学校に通うこと、「明日も学校に来たい」と思えるような学校にしていくことが大切です。この質問は、アンケートの最初の

質問「① 学校が子どもひとりひとりを大切にしているか」ともつながっています。

保護者・教職員は、ともに9割以上が「よくできている」「大体できている」と回答していますが、児童はその数値にはわずかに達していません。「学校が楽しくない」と感じている子どもが、少数であっても存在しているということを重く受け止め、その原因は何なのか、常に意識して具体的な取組を進めていく必要があると考えます。

#### ◆ ⑨ 子どもが 進んであいさつをしているか

児童と保護者・教職員との意識のずれが最も大きい質問です。児童は「できている」「しっかりやっている」と認識している場合が多いのですが、周りの大人はそう思っていません。特に、教職員の3分の2が「あまりできていない」と回答しています。学校の中においても、しっかりと相手意識をもって挨拶をしている児童とそうでない児童の差が大きいことを感じています。毎朝登校時に見守りでお世話になっている地域の方々からも「挨拶の声が小さい」「進んで挨拶をする子どもが少ない」「こちら（地域の方）から挨拶しても、返さない子どもがいる」などのお声を年度当初からお聞きしています。見知らぬ人ならともかく、いつもお世話になっている地域の方や、学校の教職員、友達に対して、相手意識をもって挨拶することは、学年や年齢に関係なく、必要なことです。今一度、挨拶の大切さについて、私たち大人もしっかり考えていかなければならぬと感じます。

#### ◆ ⑪ 子どもが 自分のよさを認識しているか（おとなが子どものよさを認めているか）

この質問も、児童の個人差が大きい結果となりました。自分のよさを認識していても、人の前でもそれを話せるかというと自信のない児童が少なからずいるということです。一方、大人は、ご家庭でも学校でも、一人一人のよさを認め、ほめ、励まそうとしています。自分に自信が持てるようになる、つまり、自己肯定感を高めるためには、ほめることも大切ですが、失敗をしたり、うまくいかなかったりする経験を乗り越えるときに支え励ますことも必要です。その失敗やうまくいかないことを子どもに味わわせないように、周りの大人がむやみに先に手を貸してしまうのではなく、乗り越え方を示してやることも時には必要です。大人としては関わり方が難しいのですが、いっしょに辛さを感じてともに乗り越える覚悟を、私たち大人がまずもたなければならぬのかかもしれません。

#### ◆ ⑭ 子どもが 将来の夢や「なりたい自分」を目指して努力しているか

今年度の学校教育目標と関連して示している目指す子どもの姿「なりたい自分を目指してがんばる子」の実現度を問うている質問です。錦林小学校の児童は、何事にも全力で取り組む子どもがとても多いです。この「なりたい自分を目指してがんばる」ということについても、しっかりと受け止めて努力している児童が多いことがわかります。ただし、将来の夢となると、具体的に思い描けていない場合もあることだと思います。また、低学年の児童については「こんなお仕事をしてみたい」と考えることができている場合が比較的多いのですが、学年が上がるにつれてその割合が低くなっていることも今回のアンケートでわかりました。一般的には高学年になるほど具体的な将来像を描けるようになるので、逆のような気がしますが、さまざまな経験をする中で、自分の夢と、それが実現するかどうかを分けて考える、冷静な思考力が育ってきている証とも言えます。高学年児童は、これからさまざまな場面で進路を考えていく機会があります。自分の生き方、まさに「なりたい自分」とはいったいどのような自分なのか、考えるということです。時に不安になることもあるでしょうが、その不安な気持ちに大人がどのように寄り添っていくのか、深いところまで考えさせられる結果となりました。